

香を送る花を看れば、それは一叢を爲してある。遨は「タノシム」、樂なり。春日に南北に遊び樂むの志は喜ぶと雖も、媿つる所は花を詠じ、鳥を賞する詩章を作るの才に乏しきことを。

是の詩も、律なりや古なりや、分明ならず。且古人雕蟲を媿つと多く言ふ。雕蟲に乏しきを媿づと言はす。何となれば、雕蟲は小細工なれば、大雅は爲さず。卑俗極まる語、評する價值無し。

### 五言秋日言志一首

欲<sup>ク</sup>知<sup>ント</sup>得<sup>ル</sup>性<sup>所</sup>一<sup>ヲ</sup>  
來<sup>尋</sup>仁<sup>智</sup>情<sup>一</sup>  
氣<sup>爽</sup>山<sup>川</sup>麗<sup>一</sup>  
風<sup>高</sup>物<sup>候</sup>芳<sup>一</sup>  
燕<sup>巢</sup>辭<sup>夏</sup>色<sup>一</sup>  
雁<sup>渚</sup>聽<sup>秋</sup>聲<sup>一</sup>  
因<sup>レ</sup>茲<sup>竹</sup>林<sup>友</sup>  
榮<sup>辱</sup>莫<sup>相</sup>驚<sup>一</sup>

得<sup>レ</sup>性<sup>所</sup>は何を意味するや明白ならず。案ずるに、物自然の所と見て可ならん。仁者は山を愛し、智者は水を樂しむ。山を愛するは仁者の性なり、水を樂しむは智者の性なり。其の眞を知らんと欲するには、室中に閒坐するのみにては能はず、門を出て以て、山川を觀望せざるべからず。而かも秋日なるが故に氣は爽かなり。風は高し、秋芳亦尋ぬべし。燕の巢を辭せしは、夏已に過ぎたればなり。雁の渚に下りしは、秋漸く深ければなり。一來一去、天地自然の數なり。茲に因て竹林即ち佛門の友【竹林、竹院、佛門の意味に用ふ。】榮たり辱たるの幻相には驚くこと莫かれとなり。常語、平語、別に評すべきなし。

葛野王 二一首

王子者。淡海帝之孫。大友太子之長子也。母淨御原之帝長女。十市内親王。器範宏邈。風鑒秀遠。材稱棟幹。地兼帝戚。少而好學。博涉經史。頗愛屬文。兼能書畫。淨原帝嫡孫。授淨太肆。拜治部卿。高市皇子薨後。皇太后引王公卿士於禁中。謀立日嗣。

淨御原は即ち天武天皇なり。器範以下十六字は、王の風采や材力や門地が、金枝玉葉の貴きを謂ふ。加之、博學能文能書畫、藝として通ぜざるは無し。天武の嫡孫の故を以て淨太肆の官を授けられ、治部卿に拜せらる。高市皇子は天武の子、母は尼子娘。持統天皇の十年七月十日太政大臣を以て薨ず。皇太后は持統天皇なり、持統は丁酉の年を以て位を文武に讓ればなり。謀立日嗣、日嗣は皇太子を曰ふ。

時羣臣各挾私好。衆議紛紛。王子進奏曰。我國家爲法也。神代以此典仰論天心。誰能敢測。然以人事推之。從來子孫相承。以襲天位。若兄弟相及。則亂聖嗣自然定矣。此外誰敢間然乎。弓削皇子在座。欲有言。王子叱之乃止。皇太后嘉其一言定國。特閱授正四位。拜式部卿。時年三十七。

天武天皇の九年、草壁皇子を立てて皇子と爲す。それより十年後、即ち持統天皇の三年に太子薨ず。太子子あり珂瑠と曰ふ、尙幼なり。乃ち高市を皇太子と爲さんと欲す。高市又薨ず。是に於て天皇百官を會し、日嗣を議す。衆議決せず。葛野王が説に據て、遂に皇孫珂瑠を立て皇太子と爲す。是即ち文武天皇なり。弓削皇子は葛野王の異母弟なり。史家持統天皇の聰明を嘆じ、葛野王の禮法を知るの正義を稱す。

五言春日翫鶯梅一首

聊乘<sup>カ</sup>二休<sup>シテ</sup>假<sup>ノ</sup>景<sup>ニ</sup>  
入<sup>レ</sup>苑<sup>ニ</sup>望<sup>ム</sup>青<sup>ニ</sup>陽<sup>ヲ</sup>  
素梅開<sup>キ</sup>素<sup>ニ</sup>靨<sup>エラ</sup>  
嬌鶯弄<sup>ス</sup>二嬌<sup>ノ</sup>聲<sup>ヲ</sup>  
對<sup>シテ</sup>此<sup>ニ</sup>開<sup>キ</sup>懷<sup>ヲ</sup>抱<sup>ヲ</sup>  
優足暢<sup>フ</sup>愁<sup>ニ</sup>情<sup>ヲ</sup>  
不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>老<sup>ノ</sup>將<sup>ニ</sup>至<sup>ント</sup>  
但<sup>レ</sup>事<sup>トス</sup>酌<sup>ニ</sup>春<sup>ニ</sup>觴<sup>ヲ</sup>

「休暇は休暇ならん」、休暇景と云ふ成語は不審なれど、景を日の意味に見れば  
恕すべし。版假に作る本ある由。版假なる成語は未考。公務の休暇に乗じて、春  
苑に入り以て、青陽即ち春色の様を觀望すれば、白梅は自から白色、嬌鳥は自か  
ら嬌聲を發す。靨は笑靨と成語して俗に「エクボ」と稱す。花瓣を形容す。

此の素梅と嬌鳥とに對して、襟懷雅抱を開けば、優優たる意が充足して、總て  
の心配は盡く暢び去る。老は五六十の人で無ければ稱せざるも、日本は四十初  
老なりと云ふから、老將至は幾歳なるやを知らず。但休暇の日、一杯酌で樂しむ  
べきなり。詩は古詩にして唐律に似たるものなり。

五言遊龍門山一首

命駕遊<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>  
長忘<sup>ル</sup>冠冕<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>  
安得<sup>テ</sup>二王<sup>ノ</sup>喬<sup>カ</sup>道<sup>ニ</sup>  
控<sup>レ</sup>鶴<sup>ヲ</sup>入<sup>ラシ</sup>蓬<sup>ニ</sup>瀛<sup>ニ</sup>

龍門山は周防にも在り、紀伊にも在り、此れ孰れに屬するやを知らず。冠冕は

冠と冕と形は異なるも、同じく「カヌムリ」なり。『三國志王昶傳』に、汝先人世有<sub>二</sub>冠冕<sub>一</sub>と。山水に優游するは隱人高士が事、今隱人高士の游に倣ふは、即ち大官高位の情忘るればなり。安得<sub>レ</sub>は和語の「ドウシテモ得ラレナイ」に當る。王喬は仙人の道を得た人。王喬は東漢河東の人、明帝の時、尙書郎と爲る。出て葉<sub>セツ</sub>の令と爲る。【知事なり】朔望常に縣より來朝す。帝其の來る數<sub>シハシハ</sub>にして、車騎を見ざるを恠しみ、太史をして之を伺はしむ。太史奏す、其の至るに臨み、雙鳧【二羽の鳧<sub>カモ</sub>】の飛來するありと。是に於て鳧の至るを候<sub>ウカ</sub>ひ、羅<sub>アミ</sub>を擧げ之を張る。一鳥<sub>セキ</sub>を得、乃ち賜ふ所の履なり。或は曰ふ古の仙人王子喬なりと。『列仙傳』に、周の靈王の太子晋、七月七日白鶴に乗じて山頭に駐り、時人に謝し數日にして去る。蓬瀛<sub>フウエイ</sub>仙と鶴とは太子晋以來關係の深きものとなれるなり。

大納言直大<sub>二</sub>中臣朝臣大島<sub>二</sub>一首、自<sub>レ</sub>茲以降諸人未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>傳記<sub>一</sub>】

五言詠<sub>二</sub>孤松<sub>一</sub> 一首

隴上孤松翠  
凌雲心本明<sub>ナリ</sub>  
餘根堅<sub>クシ</sub>厚<sub>クシ</sub>地<sub>ヲ</sub>  
貞質指<sub>ス</sub>高<sub>ク</sub>天<sub>ヲ</sub>  
弱枝異<sub>ニ</sub>高<sub>ク</sub>艸<sub>ニ</sub>  
茂葉同<sub>シ</sub>柱<sub>ニ</sub>榮<sub>ニ</sub>  
孫楚高<sub>フシ</sub>貞<sub>ク</sub>節<sub>ヲ</sub>  
隱居脫笠輕<sub>シ</sub>

隴は邱隴「ヲカ」なり。「リヨウ」が本音なれど、「ロウ」と發音して可<sub>ヨシ</sub>。凌雲<sub>ハ</sub>松が亭亭として雲を凌がんとする心は太明白なり。根は堅く、質は貞、枝は弱しと雖も、高艸に異なる。葉の茂きは柱榮に同じ。孫楚<sub>ハ</sub>は晉の中都人、字は子荆、才藻卓絶、爽邁不羣。少うして隱居せんと欲し、嘗て王濟に謂て曰へ、吾石の漱<sub>ソク</sub>流に枕せんと欲す。濟が曰く、流は枕すべきにあらず、石は漱ぐべきにあらず。楚が曰く流に枕して其の耳<sub>ミミ</sub>を流はんと欲し、石に漱ぎ其の齒<sub>ミガ</sub>を礪<sub>ミ</sub>かんと欲すと。始めて鎮東軍事に參す。

此の詩全體兒童語にて、佳も惡も評すべき様無し。

五言山齋 一首

宴飲遊<sub>ヒ</sub>山齋<sub>ニ</sub>  
遨遊臨<sub>ニ</sub>野池<sub>ニ</sub>  
雲岸寒猿嘯<sub>フキ</sub>  
霧浦杙<sub>ダ</sub>聲悲

葉、落、山、逾、靜、  
風、涼、琴、益、微、  
各、得、朝、野、趣、  
莫、論、攀、桂、期、

遨は樂なり。柀は柀た柀あ、舟の「カチ」なり。悲は柀かちを鼓する聲、葉落あ五字は正  
に是れ深秋の景。山は齋外なり、琴は齋中なり。各自が、朝に在る人は朝の趣き、  
野に在る人は野に在る趣き、各自特色あり。攀桂あ期は二意あり、一は今日山齋に  
て遨遊、各の其の趣きを得、何ぞ桂花の開あく秋を待んや。一は各の高官に登る所  
謂攀桂の期、そんなことを論ぜずして、今日人人の興を盡せば足る。作者以外に  
於ては、此の二意共に通ず、作者の意蓋し孰れに在るを知らず。

正三位大納言紀朝臣麻呂 一首【年四十七】

五言春日應詔 一首

惠氣四望浮  
重光一園春  
式宴依仁智  
優遊催詩人  
崑山珠玉盛  
瑤水花藻陳  
階梅鬪素蝶  
塘柳掃芳塵  
天德十二堯舜  
皇恩霑萬民

紀麻呂は、武内十二世の孫大人の子。應詔は佛典には三藏法師奉詔譯とあり、奉勅譯とはあらず。詩に應詔とあり、應勅にはあらず。勅には戒の意強く、詔には戒の意薄し、以て其の意義を知るべし。乃ち應制と同じ。天武帝の詔を奉じて作るもの。春日御宴に召され、春光の靄靄たるを讚美したるものなり。惠風即ち春風の和氣は、四方盡く浮ぶ。殊に御宴の開ける一園の春は、光更に重きを覺ゆ、重は「カサナル」にあらず「ヲモキ」なり、而して今日の式宴は、天下の仁智に依て設けられしもの、詩人をして御苑中に優游せしめ玉ふ催し、一に是れ天子の仁智より出でしなり。崑山珠玉盛は、今日の御宴に會する詩人の多きを云ふ、崑山は崑崙山の簡稱とす。『呂氏春秋』に人不愛崑山之玉。江漢之珠。而愛己之一蒼壁小璣。又「崑山片玉」は『晋書』に出づ。人の美なるを崑山の珠玉に譬ふ。瑤水は崑崙山に出づ、穆天子が西王母に會せしと云ふ瑤池是なれり。字の表面の如く、實際の水中に水花水藻陳ると解するも、今日會する人を花藻に比して云ふと見る

も、共に可なり。而して玉階、前の梅花に百蝶が來り舞ひ、宮門に沿ふ塘柳は、春日の塵を掃ひ除く、今の天子の徳は、古の堯舜よりも十倍して上なり。恩の萬民を霑す所以。

應制詩は排律を以て本義とす。是の詩も亦排律の體なり。而かも唐の排律は平仄諧和して、一絲の紊るゝを許さず。是の詩韵法はよろし、平仄は諧和せず。



# 文武天皇 二首【年二十五】

## 五言詠月 一首

月舟移<sub>リ</sub>霧渚<sub>ニ</sub>  
楓櫂泛<sub>ニ</sub>霞濱<sub>ニ</sub>  
臺上澄<sub>スミ</sub>流<sub>ナガルルノ</sub>耀<sub>カガヤキ</sub>  
酒中沈<sub>シツミ</sub>去<sub>サルノ</sub>輪<sub>リン</sub>  
水下斜陰碎  
樹落<sub>テ</sub>秋光新  
獨<sub>テ</sub>以<sub>ニ</sub>星間<sub>ノ</sub>鏡<sub>ヲ</sub>  
還<sub>マタ</sub>浮<sub>フ</sub>雲漢<sub>ノ</sub>津<sub>ニ</sub>

天皇は草壁皇子の第二子即ち天武の孫なり、丁酉元年八月一日に即位、慶雲四年六月十五日崩す。壽二十五。在位十一年間。大寶律令成り、孔子を大學寮に釋典し、文明の曦光、漸く將に四方に陸離たらんとす。而るに短壽にして崩殂、天下皆之を悲しむ。詠月以下三首、共に昨年明らかならず、大寶より慶雲の間たるや疑ひ無し。月舟は舟中に月在ればなり。霧の深き渚即ち「ナギサ」水際に移る。而して其の月舟を鼓する。櫂「カチ」は即ち楓樹を以て製するなり。又考ふ、一片の月舟は霧渚に在り、一片の楓櫂は霞濱に在りと、而して臺上は如何なる景色ぞ、霧渚を流るゝ水も、霞濱を流るゝ水も、一樣に澄んで、月影の爲め耀けり、杯中【杯は酒なり】は如何、月光が酒杯の中に移り浮ぶ、輪は月輪なり、冰輪なり。水下斜陰碎は意義明白ならざるが、恐くは斜陰即ち黄昏に水が下流の石に當て月光が碎けるならん。樹落は深秋なればなり、新は必ずしも秋の新、即ち七月を言ふにあらず。秋光の美なるを曰ふなり。獨以星間鏡、鏡は月なり。星は臣なり、鏡は君なり、君は臣の間に繞られる。月は星の間に圍まれたるなり。還は循環、月は雲漢の津に浮ぶが如しと雖も、寸時も停まらず巡周して居るなり。

此の詩を読む。一讀の下、帝王の氣象、良とに凜然たるを覺ゆ。釋智藏の詩、中臣大島の詩の如きもの、此の詩に比較するとき、氣象に於て已に天地の隔あり。讀む者細心に注意すべし。平仄の嚴ならざるは、時代の致す所、已むを得ざるなり。

### 五言述懷一首

年トモ雖レ足ルト戴クニ冕ヲ  
智ス不テ敢テ垂レ裳ヲ  
朕ニ常ニ夙ニ夜ニ念フ  
何ヲ以テ拙ク心ヲ匡タタサン  
猶ヲ不レ師トセ往ク古ヲ  
何ヲ救ハン元ノ首ノ望ヲ  
然モ毋ナシ三ノ絶ノ務メ  
且ツ欲レ臨ニ短ニ章ニ

帝王が帝王としての冠冕を戴くは、庶民の元服と同じ。然らば年二十以上を云ふこと知るべし。天皇は年十五にて即位、是の詩年十五の作とは思はれず、大寶元年、年二十歳後の作と見るべし。朕が年は普通であるが、朕が智は朝に臨んで政を聽くには乏しと自謙し玉ふなり。女后は朝政を聽くを垂簾すいれんと曰ひ、天子が朝政を聽くを垂裳と曰ふ。是の故に、朕は日日夜夜に、朕が務むべきことを念ふ、而かも拙心を如何にして匡正せんや。不師古訓に「師トセス」とあり、余は「師トセスンバ」と訓む。古訓は猶の字に拘泥しての訓ならんが、決して猶の字に拘泥するに及ばず。已に天皇は新羅學者を延き、儀仗を設建し、國學に釋典し、儒教を興隆し、一一往古を師とし玉ふこと彰彰たり。往古の正しき法を師として、以て元首としての衆望を自から救はんと欲すと解すべきなり。三絶は古來より種種の事に用ふ、一人に就ても言ひ、一事に就ても言ひ、用義頗る廣し。是の句の意

義は、『史記』の孔子晩而喜<sub>レ</sub>易、韋編三絶より來るならん。是の三絶は技倆の巧妙を言ふにあらざして、易を讀むの努力を言ふなれば、今、天皇が自分拙心を知て居り乍ら、然も努力すること毋<sub>ナシ</sub>と、是も謙虚して述べ玉ひしならん。毋は無と同じ。且欲臨短章、即ち此の五言の短章を賦し、懷を述べたるも、實は拙心を恥づとの聖意なり。

寥寥たる短章と雖も、天心の微柔懿恭なるを見るべし。唯短壽を以て崩御せられたるは、惜みても餘りあり。

### 五言詠<sub>レ</sub>雪 一首

雲 羅 囊<sub>ニシテ</sub> 珠<sub>ヲ</sub> 起<sub>リ</sub>  
雪 花 含<sub>ンテ</sub> 彩<sub>ヲ</sub> 新<sub>ナリ</sub>  
林 中 若<sub>ク</sub> 柳 絮<sub>ノ</sub>  
梁 上 似<sub>タリ</sub> 歌 塵<sub>ニ</sub>  
代<sub>テ</sub> 火<sub>ニ</sub> 輝<sub>キ</sub> 霄 漢<sub>ニ</sub>  
逐<sub>テ</sub> 風<sub>ヲ</sub> 迴<sub>ル</sub> 洛 濱<sub>ニ</sub>  
園 裏 看<sub>レハ</sub> 花 李<sub>ヲ</sub>  
冬 條 尚 帶<sub>レ</sub> 春<sub>ヲ</sub>

雲<sub>、</sub>羅<sub>、</sub>囊<sub>、</sub>珠<sub>、</sub>起<sub>、</sub>の五字未詳。雪花、柳絮、字の如し。梁<sub>、</sub>上<sub>、</sub>の五字未考、代<sub>、</sub>火<sub>、</sub>の句、雪に光あるを言ふ。園裏雪を以て花と看做すが故に、冬日已に春色を覺ゆとなり。李は「スモモ」なり。

漢土人の詠物、例せば、月とか雪とか雲とか鳥とか花とか、表面に之を詠じて、月は月、雪は雪、雲は雲、鳥は鳥と明白に其の真相を表はし、而して其の裏面には必ず深き意旨を寓してある。そこに詠物の責ぶべきものあるなり。然るに彼に在ても謝瞿の輩、當面を寫すに工夫して、裏面には何の含蓄する所も無く、詩の本義を没却して居る。我が邦人の詠物は、大概謝瞿の徒にて、到庭杜韓の域を窺

ふ能はず。王朝時代より、今日に至るまで此の如し。詩に對する淺見は、良とに悲しむべきなり。天皇が此の詩、林中の十字、江邨北海曰ふ齊梁佳句と。

從三位中納言大神朝臣高市麻呂 一首【年五十】

臥<sup>シテ</sup>病<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>鬢<sup>ニ</sup>  
意<sup>オモヘ</sup>謂<sup>ラク</sup>入<sup>ント</sup>黄<sup>ニ</sup>塵<sup>ニ</sup>  
不<sup>シテ</sup>期<sup>セ</sup>逐<sup>ヒ</sup>恩<sup>ニ</sup>詔<sup>ラ</sup>  
從<sup>フ</sup>駕<sup>ニ</sup>上<sup>ル</sup>林<sup>ヲ</sup>春<sup>ニ</sup>  
松<sup>ノ</sup>巖<sup>ノ</sup>鳴<sup>ノ</sup>泉<sup>ノ</sup>落<sup>ル</sup>  
竹<sup>ノ</sup>浦<sup>ノ</sup>笑<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>新<sup>ニ</sup>  
臣<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>進<sup>ル</sup>輩<sup>ニ</sup>  
濫<sup>ニ</sup>陪<sup>ス</sup>後<sup>ニ</sup>車<sup>ヲ</sup>寶<sup>ニ</sup>

大神或は三輪<sup>みわ</sup>に作る。高市麻呂<sup>たけちまろ</sup>を利金<sup>としかね</sup>と曰ふ。大寶中に、長門守左京太夫を歴て、慶雲三年官に卒す。年五十。壬申の功を以て從三位を贈る。

鬢<sup>びん</sup>は鬢<sup>びん</sup>の俗字。此の詩卒年の時の作か、或は以前なるか判知せず。然るに詔を蒙むりしに依て從駕する、而かも自<sup>おも</sup>から意<sup>おも</sup>ふ、此の病は愈えずして、黄塵<sup>おうじん</sup>即ち泉下の人とならんと、上林<sup>じやうりん</sup>は漢の上林苑を以て今の禁苑に譬ふ。上林なる名目<sup>その</sup>の苑が、禁中に在るにはあらず。松巖<sup>しょうがん</sup>の二句十字は、駕に陪して散策する宮庭の状なり。臣<sup>おみ</sup>是<sup>こゝ</sup>の二句は拙句にして、何等評言の施し様も無し。先進の者が、後車の寶に陪するは恥づべきになるに、濫<sup>らん</sup>の字より見れば過分であると云ふ意なれば、矛盾も甚し。

大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須 一首【年四十八】

五言春日應詔

玉管吐<sub>キ</sub>陽氣<sub>ヲ</sub>  
春色啓<sub>ク</sub>禁園<sub>ヲ</sub>  
望<sub>テ</sub>山<sub>ヲ</sub>智趣<sub>ヲ</sub>廣<sub>ク</sub>  
臨<sub>テ</sub>水<sub>ニ</sub>仁懷<sub>ヲ</sub>敦<sub>シ</sub>  
松風催<sub>シ</sub>雅曲<sub>ヲ</sub>  
鶯弄添<sub>フ</sub>談論<sub>ヲ</sub>  
今日良醉<sub>レ</sub>德<sub>ニ</sub>  
誰言湛露恩

玉管は字の如く玉製の管。『西京雜志』【卷三漢劉歆著】に、秦の咸陽宮に玉管あり、長二尺三寸、二十六孔、之を吹けば則ち見る車馬山林隱鱗相次ぐと、之を吹けば、陽氣を吐く、陽氣は即ち春色なり。而して其の春色は、禁園を啓くとなり。啓は開なり。望山智趣廣、臨水仁懷敦、是れ『論語』【雍也第六】に知者樂<sub>レ</sub>水、仁者樂<sub>レ</sub>山とあるを逆用して、知を山に用ひ、仁を水に用ひたるなり。共に天皇の徳を讚しての語。松風宮庭の松風は、宛然として雅曲なり。樹上の鶯弄は、羣臣の談論を添足したる如きなり。今日の御宴は、良とに聖徳の爲めに醉ふ。湛露恩は皇帝恩と言ふと同じ。今日陪したる者は誰か是れ皇帝の恩と言はざるものあらんとなり。

姑射遁<sub>ル</sub>太竇<sub>ニ</sub>  
崆巖索<sub>ハ</sub>神仙<sub>ヲ</sub>  
豈若聽<sub>カ</sub>覽<sub>ニ</sub>  
仁智寓<sub>ス</sub>山川<sub>ニ</sub>

神 衿 弄 春 色  
清 蹕 歷 林 泉  
登 望 繡 翼 徑  
降 臨 錦 鱗 淵  
絃 竹 時 盤 桓  
文 酒 乍 留 連  
薰 風 入 琴 臺  
莫 日 照 歌 筵  
岫 室 開 明 鏡  
松 殿 浮 翠 煙  
幸 陪 瀛 洲 趣  
誰 論 上 林 篇

姑射遁太寶は何の意義なるや明白ならず。案ずるに姑射は山の名、仙人の住所。

以て太上天皇の宮を譬えて仙洞御所と曰ふ。太寶は『周禮』に大行人掌太寶之禮。及大客之儀とあり。『論語』に出門如見太寶とあり。要するに姑射と、崆巖の二句の意は、姑射山に人間を遁れて太寶と爲るより、崆巖に向て神仙を索むるより、豈近くに在て聞聽も觀覽も自由に隙際の有る人間界に若んや。隙は俗に隙に作る。乃ち遠く仙居を思慕するに及ばず、眼前に此の娛樂あるなり。仁智寓山川、仁者は山を觀て以て仁を養ふべし。知者は水を觀て以て知を養ふべし。寓は蓄と同じ、山川其のものが已に仁知を蓄へて有るなり。神衿、清蹕は共に天皇を指す。神衿を開きて以て春色を弄し玉ひ、清蹕を停めて以て林泉を徑歴し玉ふ。登りては繡翼乃ち百花錦繡して翼の如き徑を望み玉ひ、降りては錦鱗乃ち魚類の唼嚼する淵に臨み玉ふ。絃竹乃ち絃管笙竽を吹かしめ、以て盤桓す。盤桓は意義一ならざるも、今は「歸去來辭」の撫孤松而盤桓の意義を取る。歸らんと欲して歸らず、悠悠たる貌なり。其の上に尙文を作り酒を飲み、乍ら留連す

るの悠悠たるに至る。薰風は夏日の風にて、春日にはあらず。琴臺の文字に緊切の爲め用ゐしものならん。「古詩」に薰風入五絃の句あり。薰風は物を生生たらしむ、以て聖徳に譬ふ。萇「メイ」は萇莢、本、艸の名、瑞艸、堯の時生じたりと云ふ。然らば則ち堯日は堯日と同じ。其の堯日が歌筵を照す。是も聖徳に譬ふ。岫室と松殿、人界の物を即ち仙界に譬ふ。明鏡開き、翠煙浮ぶ所以。而して臣は幸福にも、此の瀛洲即ち仙居の趣に、陪従の恩命を蒙むれり。誰論上林篇、漢の馬長卿に上林賦あり、今日の御宴に陪して、彼の上林賦を凌駕する者は誰ぞ。又論ずる者は誰ぞや。

二首、前首は他諸家と同様、古律の間に在り。後首は全く排律體なるも、而かも平仄に整正ならず。唐人の排律と較して讀む、其の麤鹵なる所見るべしと雖も、此の時代を想像すれば、亦以て嘆稱すべきなり。



正四位下治部卿犬上王 一首

五言遊覽山水。

豔<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>三<sup>ノ</sup>餘<sup>ヲ</sup>暇<sup>ム</sup>  
遊<sup>ス</sup>息<sup>ス</sup>瑤<sup>ノ</sup>池<sup>ノ</sup>濱<sup>ニ</sup>  
吹<sup>ス</sup>臺<sup>ノ</sup>弄<sup>ル</sup>鶯<sup>ヲ</sup>始<sup>メ</sup>  
桂<sup>ノ</sup>庭<sup>ノ</sup>舞<sup>ル</sup>蝶<sup>ヲ</sup>新<sup>ク</sup>  
浴<sup>ス</sup>鳧<sup>ノ</sup>雙<sup>ヲ</sup>迴<sup>レ</sup>岸<sup>ヲ</sup>  
窺<sup>リ</sup>鷺<sup>ヲ</sup>獨<sup>リ</sup>銜<sup>ム</sup>鱗<sup>ヲ</sup>  
雲<sup>ノ</sup>疊<sup>ノ</sup>酌<sup>ミ</sup>煙<sup>ノ</sup>霞<sup>ヲ</sup>  
花<sup>ノ</sup>藻<sup>ノ</sup>誦<sup>ス</sup>英<sup>ノ</sup>俊<sup>ヲ</sup>  
留<sup>ス</sup>連<sup>ス</sup>仁<sup>ノ</sup>智<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>  
縱<sup>ニ</sup>賞<sup>ム</sup>如<sup>シ</sup>談<sup>ム</sup>倫<sup>ノ</sup>  
雖<sup>レ</sup>盡<sup>スト</sup>林<sup>ノ</sup>池<sup>ノ</sup>樂<sup>ヲ</sup>  
未<sup>ダ</sup>翫<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>芳<sup>ノ</sup>春<sup>ヲ</sup>

三餘、漢の董遇言ふ、學を爲す、當に三餘を以てすべし、冬は歳の餘、夜は日の餘、陰雨は晴の餘。瑤池は西王母の住處、今以て禁中の池を指す。吹臺は『陳留風俗傳』に縣【開封縣】有<sup>リ</sup>倉頡師曠城。上有<sup>ニ</sup>列仙之吹臺。要するに吹臺も桂庭も仙觀に關する文字を以て、宮觀の美を説く。春鶯、春蝶共に啼舞す。而して池面を看れば、浴鳧あり、魚を窺<sup>ハ</sup>の鷺あり。雲疊、疊は「サカヅキ」、酒を酌み乍ら煙霞即ち春色を賞し、而して口には英俊が作る所の花藻を誦す。而して仁智即ち山水間に留連す。縱賞は十分に賞觀する意。如談倫は晉の清談一派の倫と同じとの意ならん。雖盡林池樂、未翫此芳春、此の二句も意義明白ならず、解せざるも可なり。

正五位上紀朝臣古麻呂 二首【年五十九】

七言望雪 一首

無爲聖德重寸陰  
有道神功輕球琳  
垂拱端坐惜歲暮  
披軒蹇簾望遙岑  
浮雲靄黤縈巖岫  
驚飈蕭瑟響庭林  
落雪霏霏一嶺白  
斜日黯黯半山金  
柳絮未飛蝶先舞  
梅芳猶遲花早臨  
夢裏釣天尚易涌  
松下清風信難斟

無爲を以て天下を治むるは、眞に是れ聖徳の天子なり。無爲とは何ぞ、強て不自然を行はざることなり。『淮南子』に聖人不<sub>レ</sub>貴<sub>二</sub>尺之壁<sub>一</sub>而重<sub>二</sub>寸之陰<sub>一</sub>、陰は日影なり。一寸の日影、時の短かきを言ふなり。陶淵明の祖たる陶侃嘗て人に謂て曰く、大禹は聖者、乃ち寸陰を惜む、衆人に至りては、當に分陰を惜しむべし。漢の李邕曰ふ日也月也容光之謂<sub>二</sub>神功<sub>一</sub>と。球琳は『尚書』に出づ。球も琳も共に古美玉の名。有道は、上の無爲に對する語。寸陰の重きを知る聖人や、神人の徳功は、球琳を輕んずる固より其所。垂拱は衣を垂れ手をこまぬき何事もなさざる義。垂拱而天下治は『尚書』の語。善意義の方に用ふるが本義なり。然るに今は作者が雪を望む爲めに用ふ聊か本義と違へり、徒手に作るを可とす。端坐は行儀正しく坐するなり。遙岑は遠方の山。靄黤は雲の盛なる貌。漢の潘尼の詩に、朝

雲鬢黷とあり。然かも本義は晴天美麗の日に用ひ、雪意の際、陰鬱の天には用ひず。縈は縈紆えいふうなり。岫は山の穴なり。驚飈は勢の強き風。蕭瑟は冬の風の鳴る形容。霏霏は雪の飛ぶ形容。黯黯は日の暗き形容。一嶺白は雪が金山全嶺を白くしたるなり。半山金は雪が歇んで、斜日が暗き乍らも、半山に金色を爲すならん。此の如き景色も實際に往往有るなり。柳絮の飛ぶは春日にて、冬日にあらず。是の故に、柳絮飛ぶと見しは柳絮にあらずして、是れ白蝶の舞ふなり。而して眞の梅花は未だ開かざるに六花は早く臨む。夢裏の十二句、判然と意義解し難きが、鈞天の樂は夢裏に於ても尙涌き易きが、松下清風即ち高士の風は信に斟み難しとならん。『史記』に趙簡子なる者、夢寤めて曰く、我帝所に之ゆき、甚だ樂しむ。百神と鈞天に遊び、慶樂がく、九奏、萬舞、其聲心を動かすと。

此篇、禁苑に於ての作なる如く、又庭林の字より見れば、自家に於ての作なる如く、又結末二句の如きは、之に續くの句が尙有るやの感あり。要するに、完構のものと言ふ能はざるなり。

### 五言秋宴得聲清驚情四字 一首

明離照シ 昊天ヲ  
重震啓ク 秋聲ニ  
氣爽煙霧發  
時泰風雲清  
玄燕翔已返  
寒蟬嘯且驚  
忽逢文雅席ニ  
還愧七步情一

明離は太陽の異名ならん。未驗出典。昊天は普通に天を指し、特に秋天に用ふ、舊版昊天とあり昊天は夏日なれば誤寫なり、重震未驗出典。地震ふ毎に時節變ず

ればならん。氣爽は秋日なればなり。時泰、天下治まればなり。天下治まらざる時は風雲起る。風雲起らざるは世が清きなり。玄燕は初夏に來り、秋風吹けば暖地に返る。寒蟬は秋蟬なり。寒蟬の飛ぶ狀、眞に物に驚く如きは實事なり。文雅席は多人數の會合する席上。恐くば、分韻して八庚の韻を得て、此の詩成りしならん。七歩情、七歩才は魏の曹子建なり。韻字の已むを得ざるならんが、情の字を以て七歩に添ふるは拙なりと謂ふべし。

大學博士從五位下美努連淨磨 一首

五言春日應レ詔

玉燭凝<sub>リ</sub>紫宮<sub>ニ</sub>  
淑氣潤<sub>フ</sub>芳春<sub>ニ</sub>  
曲浦戲<sub>ニ</sub>嬌鴛<sub>ニ</sub>  
瑤池躍<sub>ル</sub>潜鱗<sub>ニ</sub>  
階前桃花映  
塘上柳條新  
輕煙松心<sub>ニ</sub>入  
嘯鳥葉裏<sub>ニ</sub>陳  
絲竹<sub>ヲ</sub>遏<sub>ニ</sub>廣樂<sub>ヲ</sub>  
率舞洽<sub>シ</sub>往塵<sub>ニ</sub>  
此時誰不<sub>レ</sub>樂  
普天蒙<sub>ル</sub>厚仁<sub>ヲ</sub>

先哲曰ふ。淨麻呂は天川田奈命に出づと。玉燭凝紫宮、夜でなければ燭は無用であるが、紫宮は陰鬱なる廊下なぞに、晝も亦點するならん。淑氣は春日の和氣。曲浦を見れば鴛鴦嬌として戯れ、瑤池を覽れば潜み居る錦鱗が飛び躍る。宮階の前の桃花は、花花互いに映じ、御塘上の柳條は條條相新なり。而して霏霏たる輕煙は飛び來りて松間に影を入れ、啾啾たる黃鳥は、樹樹の葉の陰に聲を陳ぬる。絲竹遏廣樂は、「廣樂ノ絲竹ヲ遏メ」の意義、官中の樂を廣樂と曰ふ。奏樂の終りしこと。率舞洽往塵、未驗出典。普天、『詩經』に普天之下。莫<sub>ク</sub>非<sub>ル</sub>王臣<sub>ニ</sub>。率土之濱。莫<sub>ク</sub>非<sub>ル</sub>王土<sub>ニ</sub>。是に由て之を案ずれば、上の率舞も或は率土の誤寫なるやも知れず。天下の人民、皆聖徳を蒙むらざるは無し。